延喜式に載る武蔵四牧の一つ。四谷町から弐分方町にかけての地と比定され、旧小名由比野の地名も残る。

由比の牧

延長五年（九二七）「延喜式」によると今の八王子市大楽寺町から弐分方町の付近一帯は、広大な牧場があり武蔵四牧の一つ「由比野」という地名で呼ばれていた。

この牧は、奈良時代から平安時代中頃まで朝廷の直轄牧場として馬を増やし、毎年一定の馬を献上することを定めていた。

ちなみに、武蔵四牧は由比牧の他に石川、小川、立野の各牧として延喜式に記されているが、石川は八王子の石川、横浜の本牧周辺、小川は、大栗川上流あきる野市二の宮周辺、立野は八王子の館、埼玉県東松山市などと言われており、地名の場所は定かではない。

この他に、多摩市の小野神社周辺の小野牧もあったのではないかとも言われている。

◇散歩のみどころ

陣馬街道の神戸バス停から出発し、由比牧を中心に凡そ五㎞の行程。

街道を左に折れ暫く歩き、無量院跡地へ、さらに観音堂へ。そこからさらに南へ行くと由比氏館跡と由比牧、牧堀跡に出る。ここから西へと向かい圓光院跡、御屋敷、神明社、不断院、八王子千人同心と縁の深い権現社へと至る。

東へと転じて暫く歩く。芭蕉の弟子星布の連額がある八坂神社、疣とり水の熊野堂跡地へ。そして松姫が逗留した地へ。さらに高土手（野堀川）緑地を東へ歩くと由比牧の中心地に至る。東明治学校跡地の長圓寺、大楽寺跡を拝観し陣馬街道に出る。

陣馬街道を右へ入ると直ぐに円乗院跡の諏訪下町会館に着く。会館前の旧道を西の方に行くと諏訪神社である。龍頭の獅子舞、諏訪饅頭で有名。お参りの後、隣の図書塚で解散。

①萬年山無量院跡地と大乗妙典一字一石供養塔

弐分方町四十（荒井）

宗派　臨済宗山田広園寺末
本尊　如意輪観世音菩薩
開山　貴叟玄榮東堂
開基　菅沼六右衛門（村の旧家）
開創　延徳二年（一四九〇）

桑都三十三観音札所第十七番、明治六年（一八七三）七月、廃仏毀釈令により廃寺、神戸山法泉寺に合併される。

廃寺後、安田重一郎氏が安田学舎(西明治学校)を造り、学校教育の基を開いたが廃校となった。

畑地となっていたこの地を平成二十年（二〇〇八）春、道路拡張に先立ち調査したところ、宝暦八年（一七五八）に建てられた。大乗妙典一字一石供養塔が発掘され、経石も多数出土した。翌年四月、神戸山法泉寺住職、藤本宗信氏の尽力と関係者により再建され、これに合わせて延命地蔵尊も建立されている。

発掘前の無量院跡

発掘された多数の一字一石

大乗妙典一字一石供養塔

新しくなった無量院跡

②由井山報恩寺跡（観音堂）

弐分方町一丁目（荒井）

由井山（二分方山）の中腹に建てられた真言宗恩方宝生寺末の観音堂。

天正年間（一五七三～九二）以前の開基で、天正二年（一五七四）に創建され、中興開山は良弁上人といわれる。本尊は大日如来であったが現在は無い。明治初年恩方宝生寺に合併され廃寺となった。また、由比牧の由井氏舘址でもあると伝えられている。

報恩寺跡の観音堂

聖 観 音

如意輪観音

③朋塚（由井氏舘址）

弐分方町一丁目（荒井）

由井氏の舘址とされている場所は、報恩寺（現、観音堂）を中心に背後丘上の平坦地。通称由井山または二分方山と呼ばれていた。由比牧（由井野）に放牧されている馬を監視でき、外敵の侵入も一望できる絶景の丘陵地である。舘址と呼ばれる山上は朋塚とも珍宝塚とも呼ばれている。しかし由来を知る人はない。

また、黄金埋蔵伝説がある。内容は、毎冬積雪が周囲より早く溶ける場所があり、そこに黄金が埋まっているというもの。埋蔵金と早期雪解けの因果関係を説明出来る人はいないが、土地に残る言い伝えである。

「由井氏は武蔵七党中の西党に属し、由井宗弘は弘仁・天長年間（八一〇～八三三）別当として，武蔵国の牧場を管理した。のち京都に転任。日野の東光寺に居住した日野宗忠の弟。」

朋　塚（由井氏館址）

由比牧跡

④由比牧址と牧掘址

弐分方町一丁目（荒井）

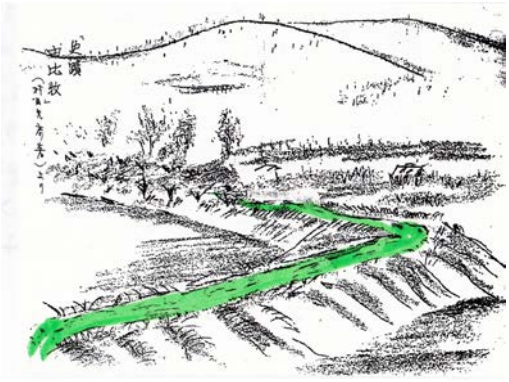
八王子市大楽寺町から弐分方町の付近一帯は、かつて牧場があり由井野という地名で呼ばれていた。広い平地は弐分方原とか神戸原と呼ばれ、奈良時代から平安時代中期頃まで朝廷直轄の牧場として武蔵四牧（石川、小川、立野、由比）の一つ由比の牧として栄えていた。朝廷は各牧場に牧をあずかる役人を置き、毎年一定の数の馬を献上することを定めていた。武蔵の四牧では毎年五十頭の馬が献上されていたという。

朋塚のあった場所

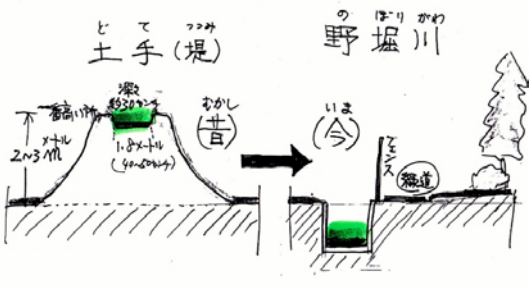
由比野の牧場では馬に水を与えるためのものか、馬の雄雌または仔馬の区別をするためのものか、未だに謎の牧掘と称せられる高く築かれた土手があった。上部に堀がつくられ水も流れていた。土手の高さは二～三m、延長は千七百六十m。しかし、しばしば堀から水が流れでたため、盛り土が削られ付近に流出して宅地や畑に被害が出た。

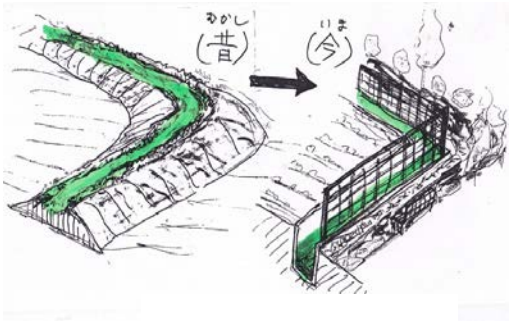
現在では、土手をけずり、平地の排水路に改修され、周りにはフエンスが張られ野堀川と名がつけられた。一部では憩いの場にもなっている。今は牧場の面影はない。

かつては、牧の守護神として弐分方村の村社であった日枝神社は、延喜年間（九〇一～九二三）に勧請されたともいわれ、文武元年（六九七）に太政官符によって創建されたと伝わっている。



「史蹟由比牧」村田光彦著より





野 堀 川

昭和 36 年頃の高堀跡

⑤圓光院 良源寺跡と石造遺物（とげぬき塔）

弐分方町一丁目（谷戸）

宗派　浄土宗相即寺派
本尊　阿弥陀如来
開山　無蓮社常誉円光上人
開創　元和二年（一六一六）四月

無蓮社常誉円光上人は元和六年（一六二〇）六月六日、七十九歳で而寂。徐地一反二畝、本堂は二間四面造り、明治初年頃（一八六八）廃寺となる。

寺跡には僧尼等の墓が七基ある。無縫塔二基のうち一基は、住僧の還蓮社相誉知弁和尚、安政三年（一八五六）のもので、他一基は塔身に文字は無いが、基礎部分の正面に寛保二年（一七四二）当時の住僧の銘が刻まれている。これがとげぬき塔として知られている。

他に相輪が失われている宝篋印塔と、「澄寿比丘尼、文政二年四月」と読める舟形光背念仏供養地蔵が一基と、上部が失われている舟形光背一基、全く首のない地蔵二基が立ち並んでいる。

いずれも寛保二年（一七四二）から文政二年（一八一九）あたりに造られた物と思われる。また、本堂再建の棟札が、元治二年（一八六五）の銘があることから、本堂は明治期にはあったものと考えられる。

とげぬき塔

廃寺の面影を残す石仏群

とげぬき塔堂

⑥お屋敷と

佐藤保武の墓

弐分方町一丁目（谷戸）

由井山（弐分方山）の麓に大御屋敷、今はおやしきと呼ばれている区域がある。古くから土地の名士の家柄で明治の中期頃まで広大な屋敷であったといわれている。その一角に、郷土の先賢といわれる佐藤保武の墓がある。右側面に「文林経誉居士　積雪は消とも残れ文字の詩」と刻まれ、左側面には「教誉居士通称孫三郎保武は文化の年間当地に生まれ、佐藤十六世の後嗣なり、幼児にして当世伯英の跡を慕い、学蛍雪を勧め、常に三余を惜しみ、自然入木屋の妙手を得なり、仰天門遊の徒遠近三百余人、今高弟門下を周旋して此の石碑を建つ、明治九子歳仲冬」と刻字されている。

佐藤保武は多くの子弟を育て、明治九年十月二十五日病死。近世幕開けにおける功績は大きい。

由比山の全景

佐藤保武の墓

⑦谷戸の神明社

弐分方町一丁目（谷戸）

伊勢神宮の神霊を祭神とし、四坪ほどの上屋のなかに鎮座している。氏子は荒井、谷戸（旧地名）地域の人々。

祭典は三年に一度とされている。

鳥居の奥右に幹回り二・五m余の樫（かし）の木の御神木がある。

神明社

神　霊

神明社鳥居

⑧共生山不断院浄光寺

弐分方町一七九

宗派　浄土宗
本尊　阿弥陀如来
寺宝　本尊阿弥陀如来（秘仏・伝室町時代作）
開山　専蓮社覚誉上人
開創　寛永七年（一六三〇）

弐分方町に隣接する大楽寺町、元八王子町、西寺方町には寺院が在るが、弐分方町には明治の廃仏希釈や合併で一寺院も無かった。

平成四年（一九九二）七月東京港区の増上寺を大本山とした不断院が、都心部再開発に伴い寺域復興のため移転して来た。本堂前からの展望は素晴らしく、八王子の街を眼下に、遠くには新宿の高層ビルまでが見える。

不断院

⑨権現社

弐分方町一四七

個人宅地内に接する丘にあり。八王子千人同心、日光東照宮の警備防火隊の幹部として勤番していた関係で、日光二荒権現及び東照権現の二社をここに勧請したといわれている。

祭礼は三年に一度。谷戸（旧地名）地域の在住者を氏子としている。

二荒東照権現祠

権 現 社

⑩弐分方の八坂神社

弐分方町二八〇ー一

勧請　不明
祭神　素戔嗚命
　（すさのおうのみこと）
　奇稲田姫命
　（きいなだひめのみこと）
創建　不明
例祭　不明

京都八坂神社の末社で、その昔は神仏一体で薬師如来を祀っていたが、その後神仏分離令により、京都八坂神社から天王宮を勧請したとある。境内には神仏時代の名残の燈篭二基が祀ってある。

また、榎本星布の俳句会の連額が保存されていたが、今は八王子市郷土資料館に保管されている。

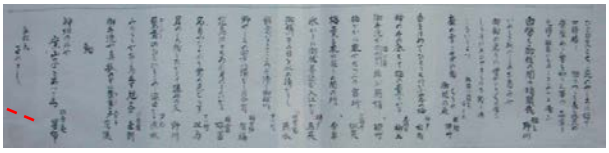
この地区には千人同心として活躍した市川家があり、俳諧道場として使われていた。

燈　籠

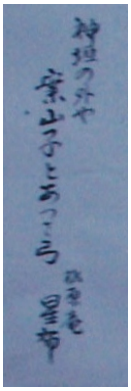
八坂神社

入口に置かれている地蔵

連　額



現在、八坂神社にある歌仙



連額の左に星布の句が書かれている
（神垣の外や案山子とあつさ弓）

⑪熊野堂跡地

（持経観音・疣とり水）
弐分方町一丁目（原）

室町時代中期に熊野堂という大きな堂宇があった。これは熊野三所権現の末社で主祭神は都御子神（けつみこのかみ）といい、土地所有者の市川家の勧請によって創建されたもの。

現在その跡地のやや下に昭和六十二年（一九八七）五月に市川家が新しく紀州熊野大社より分霊を受け、熊野神社という小祠を祀った。熊野堂の傍らには五～六人でも抱えきれない程の樅（もみ）の巨木があったが、ある夏落雷によって幹が裂かれ枯れてしまったと伝えられている。

その大樅のあとから滴たり出る清水は如何なる日照りにも涸れること無く「熊野さまのおみたらし」と呼ばれ、この水を疣（いぼ）につけると不思議にもとれてしまうので「疣とりの水」として遠近から水貰いの人達が絶えなかったという。

また、この清水池を凌ったところ金色の馬の鈴が数個発見された。この鈴は神物であるということで元の場所に戻したという。清水は今も湧き出ている。所有者の市川家では、当地にゆかりのあるという身の丈約一ｍの青銅仏を造り、持経観音と称して熊野神社下に安置している。

疣とり水

持経観音

熊野神社

その後下恩方の心源院の舜悦卜山（しゅんえつぼくざん）上人に師事し黒髪を断って僧衣に身をまとい仏門に入り荒業を積み、法名を「信松尼」と名づけられ八年の歳月を経た。

豊臣秀吉の北条征伐で八王子城陥落、関東には徳川家康が入都。松姫も徳川家康、大久保長安の計らいで御所水村の信松庵に移ることになった。

天正十八年（一五九〇）の夏か秋頃と思われるが、案下脇往来を川村に入り御所水村に向かう途中、一行は暴雨にみまわれ熊野堂に避難をする。熊野堂から御所水村の信松庵まで直線で五㎞余り、暴雨がおさまっても道は悪路、川の水は増水で渡れず天候が落ち着くまで一行は熊野堂で数日間逗留したと伝えられる。また、天正十年三月に甲斐落してから心源院での生活中に知人や旧臣を訪ねての行き帰りや近隣の市場や三人の姫たちと野山の散歩の帰りに立ち寄ったお堂と伝えられている。

御 神 体

⑫松姫逗留の地

弐分方町一丁目（原）

天正十年（一五八二）三月武田氏滅亡に伴い、信玄の六女（四女とも）松姫が高遠城から身の危険を避けるため当地に来たと言われている。

松姫姪の督姫と貞姫、武田家重臣の娘香具姫、松姫の侍女やお守り役数名、武田家の武将警護役として金丸、石黒、馬場など総勢十五名から二十名程で、和田峠を越えて上恩方高留の金照庵に到着したと言われる。

松姫が一時逗留したという場所

⑬桜木天王宮と庚申塔

（由比牧址碑）

弐分方町一丁目（原）

弐分方集落の安全と住民の息災とを祈願して、明治初期に天王を石宮内に祀られたと記されている。毎年八月一日に神官によってお湯花式の祭事が行われている。

天王宮と並立して庚申塔があり、正面には「庚申塔」と大書きされ、右側面には「天明四辰年十月吉日」と刻まれている。

庚申塔の正面には、弓、矢、太刀などを持つ青面金剛仏尊立像姿が刻まれている。その下部は風雨のため判然としないが発起人かと思える名が刻まれている。その上部に三猿が、笠石の下部には日光、月光が刻まれている。両側面には蓮花形が浮刻され、台座石から笠石までの高さは一mほど。天王宮と並立する庚申塔は何か神仏混淆時代を語っているかのようにも思える。

桜木天王宮(右)と庚申塔

由比牧址

桜木天王宮

庚 申 塔

⑭照念山月崇院長圓寺

（東明治学校跡）
大楽寺町二八一

宗派　浄土宗芝増上寺末
本尊　阿彌陀如来
　（境内に十王堂の閻魔あり）
開山　讃誉牛秀上人
　（滝山大善寺の開山）
開基　北条陸奥守氏照公
開創　天正三年（一五七五）

開創当時は大善寺末であったが、昭和二十六年（一九五一）大善寺の単立法人化に伴い芝増上寺末に転向した。四百三十年以上の歴史を持つ寺である。

本尊は信州善光寺の阿弥陀如来立像四十八体の一つとされている他に十王堂という閻魔堂がある。

本寺は、明治十年代（一八七七～一八八六）に公立東明治学校が開かれた時期があり、また明治二十年（一八八七）六月から大正十一年（一九二二）三月まで元八王子村役場が置かれ、地域の中核的役割を担ってきた寺でもある。北側の隣接地には、永禄年間（一五五八～七〇）に開山された真言宗の玉蔵院大楽寺があったが、明治初年に廃寺になった。これが大楽寺の地名になったのではないかと言われている。

更に江戸時代にはその北側の諏訪宿に陣屋があったとされる。当時の代官は勘定奉行に属し管轄地の中心に陣屋が置かれたが、今では宅地になりそれらしき場所が断定できない。

長 圓 寺

閻魔堂

閻魔様

大楽寺霊園入口

⑮諏訪下町会館

（円乗院跡・白馬観音）

諏訪町一〇六

仏法山円乗院浅間寺（廃寺）

宗派　真言宗智山派

本尊　聖観世音菩薩

開山　僧覚叶

中興　僧覚安（無覚安律師）

開創　慶長年間（一五九六～一六一五）

現在町会集会所として使用されている場所は、昔、仏法山円乗院浅間寺という真言宗西蓮寺末のお寺があったところで、廃寺前の本堂は四間に二間半の建物であったといわれる。中興の僧覚安（無覚安律師）は仏門に帰依すること厚く、江戸時代の元禄六年（一六九三）太田駿河守藤原正儀という鋳物師が造った聖観世音菩薩坐像や新たに御堂（三間半四方）を再建し、円乗院の基礎を確立した。更に跡を継いだ僧覚山は、正徳、享保年間（一七一一～三六）に土地の郷士、安田氏らと共に寄木造りの白馬像（仔馬大）を安置した。僧覚山の没年後、享保十五年（一七三〇）八月から無住時代が続き、明治初年廃寺となった。

廃寺後は村人が協力し、観音堂を守り続け信仰を集めた。大正二年（一九一三）四月十二日の大楽寺の火災で類焼し、御本尊の聖観音は搬出されたが、御堂と白馬像は焼失してしまった。その後、神戸の氏神である山王権現が諏訪神社に合祀する事になった。そこで、この御堂を貰いうけ再建修復し、聖観音と不動明王（高幡山金剛寺から移像してもらった）を安置した。

昭和四十六年（一九七一）に町会の分割を機に諏訪下町会館の集会所として観音堂をとりこむ形で会館が

建設された。平成六年（一九九四）には、白馬像が復元奉納された。

この会館の庭には数々の祠や石造物などが安置されているほか、毎年九月に庚申講が行われている。

諏訪下町会館

聖観音菩薩坐像

聖観音白馬像

白馬像と観世音菩薩坐像

昔の円乗院（写真：諏訪下町会館保存）

整然と安置されている石造仏群

⑯元八王子の諏訪神社

（獅子舞・諏訪饅頭祭り）

諏訪町（諏訪）一

勧請　一之宮諏訪大社

祭神　建御名方命
（たけみなかたのみこと）
八坂刀売命
（やさかとめのみこと）

創建　大治元年（一一二六）

例祭　八月二十六～七日

信濃国（現長野県）一之宮諏訪大社を勧請したものと伝えられている。往時より「お諏訪さま」として広く崇敬されている。

大治年間（一一二六～一一三一）以来、農耕の守護、五穀豊穣、武運長久の神として厚い信仰を集めている。

戦国期、元亀年間（一五七〇～七三）には八王子城主北条氏照により社殿が再建されたが、天正十八年（一五九〇）の八王子城攻防の折、社殿などが破壊された。その後、元和九年（一六二三）代官高室金兵衛の息子が目を患い、本社に詣で祈願したところ治癒したという。これに感銘を受け社殿を再建したと伝えられているが、貞享元年（一六八四）焼失。

かつて境内は樹齢三百年をこえる大杉群が繁り深奥な神域をつくっていた。昭和四十一年（一九六六）九月の台風により、一夜にして社殿、樹木などは倒壊した。その後、現在の社殿が再建された。

境内には末社として山王権現、火玉明神、水玉明神、鷲明神、天満宮、稲荷明神、秋葉明神、大国王宮などが鎮座されている。毎年八月二十六日、二十七日の例大祭には境内で市指定無形民俗文化財の「四谷龍頭の舞」が奉納される。

また、地元にむかしから伝わる厄除けの饅頭として、「諏訪まんじゅう」があり、今も売られている。

諏訪饅頭

諏訪神社鳥居

諏訪神社本殿

諏訪神社裏の神主の墓

奥　伝

諏訪神社の獅子舞
（四谷龍頭の舞）

子供の火遊びで焼け焦げた大木

⑰図書塚

諏訪町（諏訪）

諏訪神社の西、陣馬街道沿いの北側に図書塚公園がある。昭和二十八年（一九五三）十一月三日平井家の庭に、平井鉄太郎翁の偉業を讃えて橋本義夫氏らの知人が図書塚の碑を建てた。

平井鉄太郎は明治四年（一八七一）に生まれ、父母の熱心な教育の日々の中で育ち様々な困難を乗り越えて、鋭い判断力と抜群の実行力で、ほとんど独学の末教員となった。明治十八年（一八八五）から昭和六年（一九三一）まで四十五年間同じ小学校（現、元八王子小学校）に奉職。この間三十三年間校長として責任の地位を守り教育の根本に終始した。また熱心なクリスチャンでもあった。自由主義に徹し、官僚主義への挑戦とも感じられるくらい同村（下壱分方村）の山口重兵衛や板垣退助、大井憲太郎、多摩の石坂昌孝らとの交

流深く、盛んに往来し、その偉大さがうかがわれる。

平井鉄太郎の念願は、村営図書館または平井文庫として一般人の利用に資する目的のための図書館開設であった。在職中の給料の大半は本の買い入れに回されていたという。

しかし昭和二十年（一九四五）八月二日未明の戦火で莫大な数の蔵書が一瞬にして焼失してしまった。いまその価格を推定しても億は下るまいといわれている。昭和二十六年（一九五一）十月二十一日、八十一歳の高齢で逝った。

図書塚には、「平井鉄太郎先生よ　万巻の書は戦火に失せたり　されど愛は朽ちず」と刻まれている。

図 書 塚

図書塚に刻まれている文字

◎参考資料

・峠路　直良信夫著
・武蔵野を掘る　甲野　勇著
・由比野界隈　村田光彦著
・城東俚談　村田光彦著
・武蔵名勝図絵巻七
・延喜式
・増上寺史料集
・江戸時代の相即寺の末寺
　末庵（跡）を訪ねて　山極和子著
・多摩御陵の周囲　逸見敏刀著
・ふるさと八王子
・国土地理院地図
・ウィキーペディア
・八王子市ホームページ
・インターネット各ページ
・八王子市郷土資料館資料
・八王子市地図
・八王子市観光マップ
・昭文社